特集 つかんだ つんだ いつもいた？

あの生き物は、いま…？

子どもの頃、はらっぱ、里山、田んぼ、小川、公園や校庭、そして琵琶湖で出会った植物や動物たち生物は、いまどうしているのでしょうか？　このギャラリー展では、昭和30～50年代に子ども時代を過ごした方々が何気なくつきあっていた植物や動物たちの今を追いかけます。

▲イチモンジタナゴ
◀カネヒラ

今は少なくなったなぁ…

ボテジャコは、いま…？

代表的なのは琵琶湖やその周辺に昔からいた魚たちでしょう。石垣に手を突っ込んでとったギギ。ざるで追いまわしたホンモロコ。水路にあたりまえのようにいたメダカ。湖岸の開発や水質の悪化、乱獲、外来魚による捕食などさまざまな原因が挙げられています。

魚の中でも、タナゴの仲間はボテまたはボテジャコという愛称で親しまれてきました。いえ、厄介もの扱いだったといったほうがいいかもしれません。モロコを釣っているのに、かかるのはボテばかり。その辺に捨ててしまった記憶を持つ人も多いのではないでしょうか。漁業の対象にならないこの魚の数はほとんどわかっていませんが、1980年代のはじめ頃まではかなりの数がいたと思われます。琵琶湖博物館の水族展示の前身である琵琶湖文化館では、投網で採ったボテを肉食魚のえさにしていたほどです。しかし今は…。

琵琶湖ではここ数年、ほとんどボテを見ることはありませんでした。しかし、最近、かすかな光が見えてきたのです。詳細は展示室にて。

ミノムシは、いま…？

木枯らしの吹く季節に、葉を落とした小枝にぶら下がっているミノムシを最近見かけなくなったのではありませんか？

なーんだ、ミノムシぐらい近所の公園で見たよと言われるかもしれません。しかし、ここでいうミノムシはオオミノガの幼虫のことです。おそらくいま見つけられるミノムシはチャミノガの幼虫でしょう。

オオミノガの蓑は紡錘形で、蓑には小枝をほとんど用いません。一方、チャミノガの蓑は円筒形で、小枝を平行に密に並べて蓑の表面をおおうため、簡単に区別できます。

オオミノガは1996年頃、福岡市で突然いなくなったのです。九州大学でヤドリバエを研究している舘卓司博士によると、オオミノガヤドリバエという寄生性のハエがミノムシに寄生したからだそうです。

このハエはいままで日本には分布していなかったのですが、1990～92年頃、中国の山東省で害虫だったミノムシを駆除するために放されたそうです。このハエがどのように日本に来たのか分かっていませんが、このあと急速に日本でこのハエが見られるようになり、それと同時にミノムシの姿が少なくなっているのです。

▲オオミノガ（松本吏樹郎氏撮影）
◀チャミノガ

専門学芸員（底生動物学）
松田征也

写真は、トンネル水槽を案内しているところです。

▲カンサイタンポポ（日本のタンポポ）
◀セイヨウタンポポ（外来種）

カワヒバリガイ▶

▼ヌマチチブ

えっ？昔と今は種類が違う！

タンポポは、いま…？

綿毛を飛ばして遊んだタンポポ。実はこの何十年かで、種類が大きく変化しています。

タンポポといえば春をつげる植物でしたが、最近は秋でも、冬でもタンポポが咲いていると思いませんか。

実はタンポポには在来種と外来種があり、外来種は滋賀県では1970年代になって広がり始めたのです。外来種は春だけではなく、年中咲き続けています。

1990年代の前半には在来種と外来種の数はほぼ同じになり、1990年代の後半には、外来種の数のほうが多くなっているのです。

さらに、その在来種と外来種のタンポポに雑種が生まれていることが最近の研究でわかりました。雑種は気がつかない間に広がりはじめ、現在ではすでにすべてのタンポポの約半分が雑種になっています。

タンポポの世界も急速に変わっているのです。

セタシジミは、いま…？

なつかしの味として挙げられるのが琵琶湖名産のセタシジミです。セタシジミは琵琶湖・淀川水系特産の二枚貝で、古くから食料として利用されています。琵琶湖博物館に展示されている粟津貝塚からもわかるように、人とセタシジミの付き合いは数千年間に及びます。残念なことに、昭和32年（1957）の6072tを頂点に漁獲は減りつづけ、最近では200t前後にまで落ち込んでしまいました。セタシジミが減ったのは、砂や砂れきなどセタシジミが好む場所が減ったことと、たくさん捕りすぎたことが原因と考えられています。ところで、最近は流通の発達によってさまざまな場所のシジミ（主に汽水産のヤマトシジミ）が食卓をにぎわしています。一見して食卓には変化がないものの、中身は違ってしまっています。セタシジミへの愛着が薄れてくると、そのうち、存在すら忘れ去られるようで心配になります。

そういえば、昔は見なかったような…

ブルーギル、ヌマチチブ、カワヒバリガイ、クマゼミ

ブルーギルやオオクチバスなど、話題になっている外来生物、あるいは竹生島に集まっているカワウのことは皆さんもよくご存知でしょう。

琵琶湖で魚釣りをしていると、ヨシノボリというハゼ科の魚が石の表面にくっついていて、簡単に釣ることができましたが、最近はヨシノボリよりも少し大柄で、えらぶたに白い斑紋がある、同じくハゼ科のヌマチチブが釣れるようになりました。

琵琶湖の水の中にある石をめくってみると、石の凹んだところに、ムール貝のような二枚貝のカワヒバリガイがくっついていたりします。

また、昭和40年代に大津市の市街地でセミを捕るとほとんどがアブラゼミでしたが、最近は大きなクマゼミが多くなったように思います。

身のまわりの生き物たちを、もう一度見つめ直してみると、私たちが気づかないうちに、入り込んでいる、あるいは少なかったと思っていた生物が意外に多いことに気がつくのではないでしょうか。昔は見なかったような生き物たちを探してみると、さまざまな問題が見えてくるかもしれません。

＊　＊　＊

日常的、とまではいかなくても、最近、大型の哺乳類と街中で遭遇するケースが増えています。サル・イノシシ・クマ・シカなどなど…。なぜ出会う機会が増えたのでしょう。人とこれらの生き物が共存する道は？

このギャラリー展示では、日常的に「つかんだ」「つんだ」そして「いつもいた」生き物たちの昔と今を紹介することで、身近だった自然について考えていただく機会を提供いたします。

▲ヤマトシジミ

▲セタシジミ

琵琶湖博物館ギャラリー展示

つかんだ・つんだ・いつもいた

―あの生き物は、いま…？―

4月29日(土・祝)～6月18日(日)

■場所：博物館企画展示室